

29. レクリエーションダイバーの高気圧障害に関する実態調査 その3 —高気圧障害の罹患頻度—

内山めぐみ^{*1)} 芝山正治^{*2)} 山見信夫^{*1)}
小宮正久^{*1)} 東美奈子^{*1)} 中山 徹^{*1)}
中山晴美^{*3)} 高橋正好^{*4)} 水野哲也^{*5)}
眞野喜洋^{*1)}

^{*1)}東京医科歯科大学医学部保健衛生学科
^{*2)}駒沢女子大学
^{*3)}土浦協同病院
^{*4)}資源環境技術総合研究所
^{*5)}東京医科歯科大学教養部

レクリエーションダイバーの人口は現在約30万人と推定されている。これらのダイバーが潜水活動を行うことによって減圧症などの高気圧障害に罹患する。今回、4年間の調査結果をまとめ高気圧障害の罹患頻度について検討を行ったので報告する。

【調査場所及び方法】調査が行われた潜水スポットは、静岡県伊豆半島の大瀬崎である。調査方法は、聞き取り調査とダイビングサービスに依頼してのアンケート調査とした。

【結果と考察】調査は1991年に134名、1992年に235名、1996年に498名、1997年に275名の計1142名である。

男女比は、全体で男性67%、女性33%であるが、近年、男女比が接近している傾向が認められる。全国のCカード（潜水認定書）発行枚数の男女比と今回の比を比較すると本調査の男性比率が高い傾向を認めた。これは調査地のダイバーの特性と考えられる。また、年齢構成は男性が25～34歳、女性は20～29歳が中心であった。

高気圧障害の罹患頻度は、年々減少傾向にあり1991年と1992年調査では約40%であったが、1996年調査で26%、1997年調査で22%であった。この減少傾向の理由は、本調査では調べることができなかったが、安全教育の充実などが要因となっているようである。

30. レクリエーションダイバーの健康に関する意識調査 その4 —ダイブコンピュータとプロフィールの実態—

小宮正久^{*1)} 芝山正治^{*2)} 中山晴美^{*3)}
内山めぐみ^{*1)} 山見信夫^{*1)} 毛利元彦^{*4)}
他谷 康^{*4)} 眞野喜洋^{*1)}

^{*1)}東京医科歯科大学医学部保健衛生学科
^{*2)}駒沢女子大学
^{*3)}土浦協同病院
^{*4)}海洋科学技術センター

【目的】レクリエーションダイバーを対象に行った調査の中からダイブコンピュータの使用状況と安全意識の分析検討を行った。

【期間】期間は1996～97年の2年間である。

【結果と考察】ダイブプロフィールで1日に3本（タンク本数）以上の潜水を行ったダイバーは129名（17.9%）であった。そのうち5本のダイバーが4名、4本のダイバーが18名、3本のダイバーが107名であった。

1日に3本以上のダイブプロフィールが完全に調査されたダイバー（112名）に対して、U.S. Navyのダイブテーブルを用いて平均水深及び最大水深並びに潜水時間から減圧表をそれぞれ引いて確認した。その結果、最大水深と潜水時間の箱型潜水でみると、減圧を要するダイバーは112名中80名（71%）であり、減圧停止を行ったダイバーは54名（68%）であった。平均水深で減圧表を引いた群では、減圧を要するダイバーが86名中20名（23%）に認められた。この中で減圧停止を行った者は13名（65%）であり、残りの7名（35%）は減圧停止を無視したことになる。これは、ダイブコンピュータを信頼して、その指示通り無減圧の潜水を行っているか、有減圧の潜水であっても指示を無視しているかは今回の調査では調べられなかった。何れにしろ機械であるダイブコンピュータの信頼性に対してより安全な潜水を心掛ける必要がある。